

2023年8月11日

北広島の戦争遺跡を訪ねて

北広島九条の会

1. 陸軍特別大演習と聖蹟記念碑

旧島松駅通所からほど近い島松演習場（正式には北海道大演習場島松地区弾着地）を含む石狩平野を舞台に、1936（昭和 11）年の 10 月 3 日から 5 日まで、陸軍特別大演習が行われました。特別大演習は、年に 1 回、大元帥である天皇が指揮して行う陸軍最大の年中行事です。34 回目で最後になった特別大演習が初めて北海道で実施されたのは、ソ連を意識してのことでした。

大本営が北大農学部におかれ、昭和天皇が 3 日は由仁村（当時）で、5 日は恵庭村（当時）島松で演習を視察しました。昭和天皇は苗穂駅で列車に乗りこみ恵庭駅で降車し、自動車に乗り換え桜森まで行きました。そこで車から降りた後、乗馬し視察場所の二扇台に向かいました。1938（昭和 13）年、桜森に、村費と村民の募金で聖蹟記念碑が建てられました。聖蹟の文字は、昭和天皇に同行した広田弘毅首相が書いたものです。聖蹟記念碑は島松演習場内の二扇台にもありますが、これは小学校教員と小学生の募金によって建てられました。

陸軍特別大演習 2 万人の将兵が南北両軍に分かれ参加しましたが、北軍の司令部が東部・西部の尋常小学校におかれしました。北軍は旭川第 7 師団、南軍は弘前第 8 師団でした。

2. 旧島松駅通所付近にある防空壕

島松は「岩石のあるところ」を意味するアイヌ語シュママップからできた地名で、かつて大理石などの硬い岩石とは異なる軟石が採掘されていました。1937（昭和 12）年、千歳海軍航空基地開設に向けて飛行場の拡張工事が行われましたが、滑走路の基礎に島松軟石が大量に使用されました。軟石を切り出す作業には、囚人（受刑者）も従事していました。

旧島松駅通所付近の道路沿いにある斜面の下部に、近くに住む家族が防空壕として利用した施設が複数残っています。左右側面に島松軟石が積まれ、天井が木材で補強され、空気孔としての煙突を備えたものもあります。

島松駅通所は、1873（明治 6）年に札幌本道（現在の国道 36 号）の開通とともに設置されましたが、1884（明治 17）年には中山久蔵が駅通取扱を命ぜられ、以後同家が駅通所となりました。現在の建物は一部復元されたもので

すが、明治天皇が来道した時に立ち寄って休憩した座敷などが当時のまま保存されています。駅逦所の構造を残す建物としては道内最古のもので、1984（昭和 59）年には国指定史跡となりました。

旧島松駅逦所と並んで、150 年前の 1873（明治 6）年にこの地で水稻栽培に成功した中山久蔵を記念する寒地稲作発祥の地の碑と、1877（明治 10）年にこの地まで見送りに来た札幌農学校の学生たちに、「ボーイズ・ビー・アンビシャス（青年よ、大志を懐け）」の言葉を残して別れを告げたクラーク博士の記念碑が建っています。クラーク博士の説いた「大志」は、個人の立身出世ではなく、他人に尽くすことを意味しています。

旧島松駅逦所の近くを走る国道 36 号線のうちの、札幌から千歳までの 34.5 キロメートルは、1953（昭和 28）年、それまでの砂利道から主にアスファルトで完全舗装されました。北海道で最初の舗装道路です。戦後、日本を占領した米軍が、真駒内の司令部と千歳基地間の道路の舗装化を求めたのに応じ、日米行政協定に基づき日本が負担する安全保障費を使って、約 1 年の突貫工事で完成しました。米軍の弾薬を運ぶ軍用道路であったことや弾丸のようなスピードで車が走行していると見られたことから弾丸道路といわれました。

3. 北広島リハビリセンター一帯で起こった自衛隊機誤射事件

2001（平成 13）年 6 月 25 日、午前 10 時 55 分ごろ、島松演習場で射爆訓練中の航空自衛隊の戦闘機が訓練空域を越えて北広島市上空に達し、突如 20 ミリ機関砲の「訓練弾」を発射しました。発射は約 2 秒間続き、この間に長さ 7 センチの銃弾 188 発が、北広島リハビリセンター・竹山高原温泉・サンパーク札幌ゴルフコースなどがある富ヶ岡地区に着弾しました。

被害は北広島リハビリセンターの施設と敷地内に集中しています。同センターの駐車場にとめてあった乗用車のガラスが割れて粉々になったほか、バス用車庫や渡り廊下の鉄製の屋根が突き破られました。当時、同センターでは 15 人の通所者が体育館で運動をしており、入所者 172 人のうちの 10 人前後が外に出て散策を楽しんでいました。ほかに、施設の職員約 80 人が働いていました。幸いなことに人的な被害はありませんでしたが、少し間違えば、とり返しのつかないことになったかも知れない重大な事故が起こったのです。

北広島市・恵庭市など地元自治体は、自衛隊に抗議し、ただちに訓練を中止するよう申し入れました。また、着弾箇所東側の北広島団地第四住区自治連合会、西側の西部地区連合町内会は、それぞれ緊急役員会を開き、訓練の完全中止、事故の経過説明と謝罪を求めることを決めました。市民の抗議集会も開かれました。これに対し防衛庁は訓練を中止する一方、9 月 4 日、「電気系統の故障で機関砲が作動した可能性が高い」とする調査結果を発表しました。

最終的に防衛庁は、飛行訓練コースを現地点から西北西に約 3 キロメートル移動させて市街地から遠ざけました。それに伴い標的も現在の位置に移動させることにし、12 月に 16 日間検証飛行を行った末、2003 年 9 月に訓練を再開しました。しかし、市街地周辺に演習場がおかれ訓練が続けられる限り、危険と隣り合わせの状態は解消されません。

4. 広島神社の忠霊塔

戦争で亡くなった人びとを慰霊する碑は各地に建てられていますが、その多くは戦闘員つまり軍人・兵士を対象としたものです。慰霊の文章が添えられています。そのほとんどはアジアへの加害の事実にはふれていません。広島神社の境内にある碑も同じ性格のものであります。

この碑は敗戦後の1958(昭和33)年に、広島村忠霊塔建立期成会によって建てられたものですが、天皇のため戦ったことを意味する「忠」という言葉が依然として使われています。また、戦争の表記にも問題があります。

碑には、131名の戦死者の名前が、次のように戦争ごとに刻まれています。

「日露戦役」(1904～1905年、日露戦争) 11名

「尼港事変」(1920年、尼港事件＝ニコラエフスク事件) 1名

「満州事変」(1931年～、15年戦争) 2名

「日支事変」(1937年～、日中戦争) 14名

「大東亜戦役」(1941～1945年、アジア・太平洋戦争) 103名

このうちのニコラエフスク事件については、あまり知られていません。この事件は、ロシアで誕生した、「世界初の社会主義政権」を倒すため、日本が始めたシベリア出兵(1918～1922年)の最中に起こりました。1918(大正7)年、日本軍はアムール川の河口にある北洋漁業の拠点ニコラエフスクを占領しましたが、1920(大正9)年にパルチザン(非正規軍であるゲリラ)部隊に降伏し休戦協定を結びます。その後、武装解除を求められたという理由で日本軍は休戦協定を破り攻撃を開始しますが、反撃され約600人の日本人が死亡し、民間人をふくめ100名余りが捕虜になりました。救援の日本軍が近づいたため、パルチザン部隊は捕虜を殺害して撤退します。パルチザン部隊の隊長は、後にロシア側によって処刑されますが、日本政府はこの事件を口実に北樺太を占領するとともに、国民のロシアと社会主義への憎悪の感情を煽りました。

最も犠牲者が多かったアジア・太平洋戦争における旧広島村出身者の地域別戦死者数は、沖縄17名、中国11名、ガダルカナル・樺太5名、フィリピン・メレヨン島4名、ニューギニア・アリューシャン列島3名などとなっています(2014年、北海道保健福祉部保護課調べ)。

なお、この忠霊塔の中には、戦前に建立された、日露戦争の戦死者の慰霊碑が収められています。

5. 囚人が掘ったアオンボ川(共栄幹線排水路)

1938(昭和13)年の春から秋にかけて、戦時中の食糧増産を目的に湿地帯の掘削排水工事が囚人を使って行われました。東部中学校手前の排水溝から北の里の水田地帯を通過して千歳川にいたる2.3キロメートルです。終点の千歳川との合流点には、現在共栄排水機場がおかれています。これによって、国道274号線の北側に水田が開かれました。

戦前、刑の軽い囚人は青い服を着せられたのでアオンボ(青ん坊)、重い囚人は赤い服を着せられたのでアカンボ(赤ん坊)、ともいわれました。この掘削工

事にあたった囚人たちは青い服を着用していましたので、共栄幹線排水路はアオンボ川と呼ばれるようになったのです。

腰縄で数珠つなぎにされたアオンボたちは、軍歌を歌いながら、宿泊先の旧共栄会館から毎日工事現場に通っていました。看守が5名ついていたことはわかっていますが、囚人たちの人数、どこの刑務所の囚人であったかは、記録がなく不明です。同じ年の5月から、帯広刑務所の囚人40人が「千歳方面の河川工事に泊まり込みで従事した」という記録が残っていますが、残念ながらそれ以上はわかりません。

6. 北広島陸軍通信所の地下壕・トンネル

1944（昭和19）年、現在北の台小学校の敷地になっている一帯に札幌に司令部があった旧陸軍第五方面軍特種情報部の北広島陸軍通信所がおかれしました。通信所の任務は、ソ連・アメリカの通信を傍受し、暗号を解読・翻訳することでした。北広島が本部となり、エトロフ島の天寧、ホロムシロ島の柏原、樺太（サハリン）の上敷香（レオニドボ）に支部が配置されました。

2メートルほどの堀で囲まれた敷地内には、高さが10メートル以上ある2本の棒の間に張られたアンテナ線と通信機器を設置した、平屋の隊舎があり、通信所に隣接して軍人・軍属用住宅が用意されていました。1945（昭和20）年7月からは、空襲を避けるため地下に通信所を移す工事が始まります。通信所の近くの森には地下壕、通信所の東側、現在の道道江別恵庭線を少し越えたところにある崖には、直径約1・8メートルで長さが数十メートルのトンネルが2本掘られました。しかし地下の通信所が完成しないうちに、敗戦となります。この作業には、通信所の近くにあった無碍光寺・光顕寺を宿泊場所とした、50人を越える朝鮮人労務者が従事しました。

通信所には100人以上の軍人・軍属がいました。大学出身の英語・ロシア語が堪能な隊員がかなりいましたが、ハワイ生まれの日系2世も4名いました。その一人がプロ野球選手の田中義雄（通称カイザー田中）で、ハワイ大学を卒業後、1937（昭和12）年捕手として阪神に入団し活躍しています。

敗戦直後、証拠隠滅のため隊員と指示された住民によって隊舎は取り壊され、武器・弾薬は千歳川などに投棄されました。1948（昭和23）年に広島村は、残された官舎を村営住宅として国から購入し、復員者や引揚者の住宅としました。

なお、通信隊がおかれる以前、この一帯は軍馬訓練所となっており、育成した軍馬を連れて農家の人たちが集まり、馬の飼育状況の点検・指導を受けたり乗馬訓練を行ったりしていました。

7. 開拓記念公園の「被爆石」

開拓記念公園は、和田郁次郎ら広島県人103名が移住してから100年経ったことを記念して、1984（昭和59）年に開園しました。

公園内に1996（平成8）年の北広島市誕生を記念して、広島市少年野球協議会と広島市原爆被爆者協議会佐伯支部から送られてきた「被爆石」が4つ置か

れています。その一つに「1945-8・6-8:15」と刻まれている通りの年月日と時間に原爆が広島に投下され、想像を絶する熱線・爆風・放射線が人間と建物を襲いました。「被爆死」（即死を含め 1945 年末までの死亡）した人数は 14 万人にのぼります。「被爆石」は、爆心地から 1 キロメートルのところにあった広島市役所の旧庁舎の一部です。そこでは約 30 人が「被爆死」しましたが、柱・梁などの構造部に被害がなかったため、1985（昭和 60）年まで庁舎として使われました。

なお、緑葉公園の入り口にも、「交流の翼」「一球入魂」とそれぞれ刻まれた「被爆石」が二つ並んでいます。

8. 「平和の灯」モニュメント

1996（平成 8）年に北広島市誕生を記念し、平和と友好を願う北広島市のシンボルとして「平和の灯」モニュメントが建てられました。広島市にある平和記念公園の「平和の灯（ともしび）」からの分火が、姉妹都市の東広島市を経て、空輸され、モニュメントに点火されました。現在は、「平和の灯を守る市民の会」が、維持・管理しています。また、市役所 2 階ロビーには「平和の灯」の火種が灯っています。そして、毎年 8 月には、小中学生の代表がこども大使として東広島市に派遣され、6 日の平和記念式典に参列などしています。2020 年からコロナ禍で 3 年連続中止となっていました。今年 4 年ぶりに派遣されました。これで 34 回目となります。

なお、北広島市は 1988（昭和 63）年 4 月 1 日に平和都市を宣言しています。この平和都市宣言は、「人類にとって、有史いらい今日ほど恒久の平和を求める声が広がりを見せている時代はありません。原爆の脅威を目のあたりにした日本国民が、広く世界に向けて平和の尊さを訴えていくことは極めて意義深いものがあります」で始まり、「北広島市は憲法の本質に基づく恒久平和の実現を願う市民の意思をここに表明し、平和都市を宣言する」と結ばれています。

* 本資料作成にあたって、主に下記の諸文献を参考にしました。

『新北海道史』、『星霜 6 北海道史 1868—1945』（北海道新聞社）、『北広島市史』、『郷土研究 北ひろしま』、『思い出の道—北広島を支えた人々』、『恵庭市史』、『新千歳市史』、『由仁町史』、守屋憲治『北の翼—千歳航空史』（みやま書房）、大島正健『クラーク先生とその弟子たち』（新地書房）、『忘れ得ぬ戦禍』（北海道新聞社）、有賀伝『日本陸海軍の情報機構とその活動』（近代文芸社）、『戦時行刑実録』（矯正協会）、『共同研究広島・長崎原爆被害の実相』（新日本出版社）、山下和也ほか『原爆を見た建物』（西田書店）、『日本帝国の膨張と縮小』（北海道大学出版会）、『帝国陸軍編制総覧』（芙蓉書房）、『北海道年鑑 2002 年版』（北海道新聞社）、『北海道大百科事典』（北海道新聞社）、『日本陸海軍総合事典』（東京大学出版会）、『戦争遺跡事典』（柏書房）、『プロ野球人名事典』（内外アソシエーツ）、『国史大辞典』（吉川弘文館）、『北海道地名分類字典』（北海道新聞社）、『地学事典』（平凡社）、